

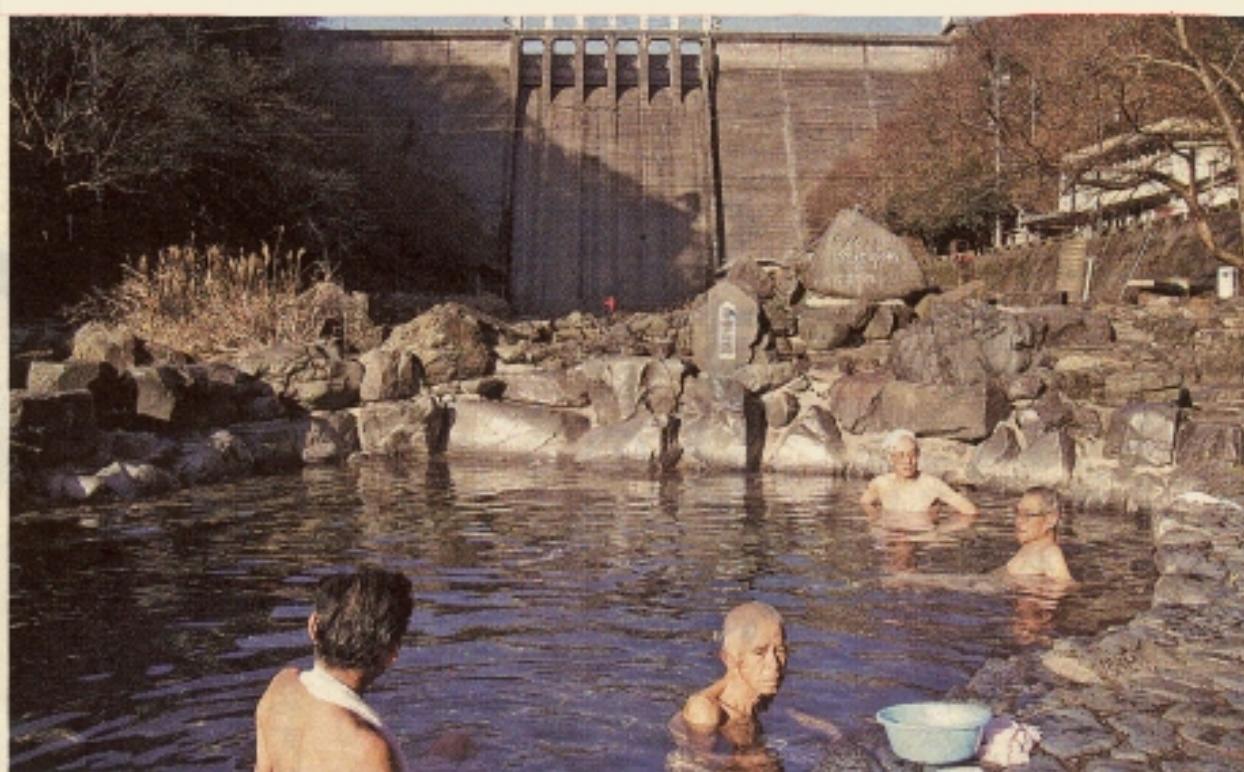
温泉列島再発見

温泉教授 松田 忠徳

都会の人々にとって、たとえ一、二泊であっても、温泉は“現代の湯治場”に違いない。

この時代、質のいい温泉と地場の食材を使った料理は最も求められるものだろうが、感動や再発見のない

■湯原温泉（岡山県）



共同露天風呂の「砂湯」。湯原ダムの真下にあり、無料で入浴できる

蒜山（ひるぜん）高原に源を発し、南流して岡山市で児島湾に注ぐ旭川。その上流域の山あいに、小・中規模の旅館二十軒ほどから成る湯原温泉（岡山県真庭市）が湯煙を上げる。その多くが地場資本で、それだけに結束力が強い。

このような立地の温泉場こそ、日本人の琴線にふれる癒やしの原風景なのである。バブル経済の恩恵に浴さなかつた分、それほど疲弊することもなかった。推定湧出量（ゆうしゅりょう）毎分六千リットルがすべて自噴泉だというから驚きだ。有名温泉地が生命線である温泉すらもバブル（泡）化してしまったところが少ないことを考えると、つい湯原の今後に多大な期待をかけてしまいたくなる。

蒜山（ひるぜん）高原に源を発し、南流して岡山市で児島湾に注ぐ旭川。その上流域の山あいに、小・中規模の旅館二十軒ほどから成る湯原温泉（岡山県真庭市）が湯煙を上げる。その多くが地場資本で、それだけに結束力が強い。

蒜山（ひるぜん）高原に源を発し、南流して岡山市で児島湾に注ぐ旭川。その上流域の山あいに、小・中規模の旅館二十軒ほどから成る湯原温泉（岡山県真庭市）が湯煙を上げる。その多くが地場資本で、それだけに結束力が強い。

中国山地の懷に抱かれた蒜山（ひるぜん）高原に源を発し、南流して岡山市で児島湾に注ぐ旭川。その上流域の山あいに、小・中規模の旅館二十軒ほどから成る湯原温泉（岡山県真庭市）が湯煙を上げる。その多くが地場資本で、それだけに結束力が強い。

蒜山（ひるぜん）高原に源を発し、南流して岡山市で児島湾に注ぐ旭川。その上流域の山あいに、小・中規模の旅館二十軒ほどから成る湯原温泉（岡山県真庭市）が湯煙を上げる。その多くが地場資本で、それだけに結束力が強い。

人と自然に優しい宿

廃油を送迎車の燃料に



△交通 JR姫新線中国勝山駅から中鉄バス蒜山高原行きで約三十五分、湯原温泉下車△温泉 アルカリ性単純温泉、三十六度。共同浴場は「湯原ふれあい交流センター（湯本温泉館）」（0867-62-2039、料金六百円）。砂湯は一月十九日午前十時～午後十時半受け付け、無休、入浴料六百円。湯原ふれあい交流センター（湯本温泉館）は大掃除で入浴不可（天候により変更も）△問い合わせ 湯原観光協会（0867-62-2526）。ブチホテルゆばらリゾート（部屋数全十室、0867-62-2600、一泊二食一万三千円から）

さん運転の英國製リムジン（通称ロンドンタクシー）で、エコツアーオーに出る。古林さんは持ち前の明るく前向きなキャラで、湯原再生のための仕掛けを矢継ぎ早に打ち出してきた。

「温泉場で生活しているのに湯原温泉のことを知らないことに気づいて始めた『温泉指南役』制度。湯原温泉病院と提携しての『湯けむりドック』。川上俊爾院長は「温泉でリラックスして、心安らかに自分の健康と向き合う」宿泊ア

ト二十台のバイオディーゼルカーを走らせている。現在、宿の送迎車など、約ラン付き人間ドックを、積極的に支援している。

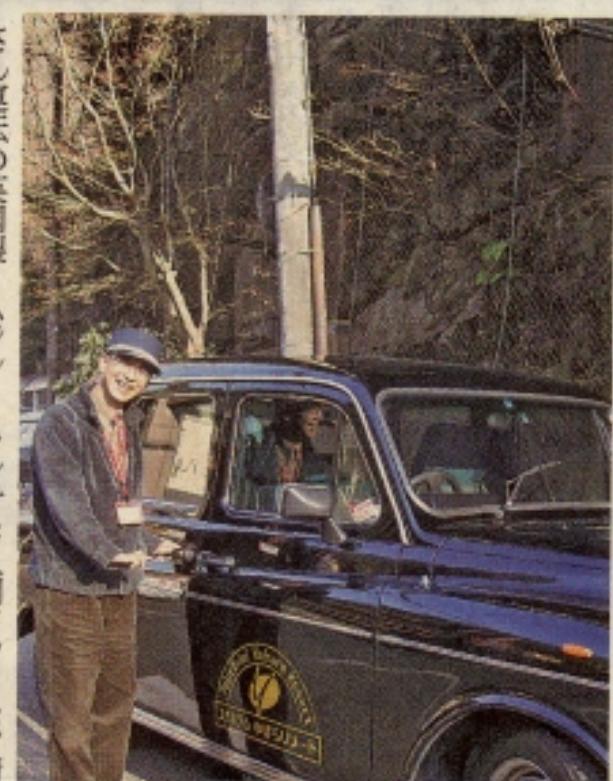
古林さんと川上院長の話を聞いてみると、意の疎通が実にうまくいく。二人の触媒は湯原温泉に対する愛情である。

「現代の湯治場につなげるために、私たちが率先して環境に優しくなくてはならないことに気づきました。湯原は都会の人々を癒やす場です。温泉は自然の一部ですから、自然に優しくして、お客様にも優しくして、お客様にも優しくはできないと——」

古林さんは胸を張る。

「うちの宿では、宿泊客から天ぷら油を一ヶ月五百円で買い取ります」と笑う。

古林さんの宿では、地場の新鮮な食材を使うため天ぷら油はあまり出ない。これも二台のロンドンタクシーの燃料を確保するための、古林さんならではのアイデアなのである。



ブチホテルゆばらリゾートのリムジンと古林さん。天ぷら油を再生した燃料で走る



人間のことを、考える。
環境のことを、もつと考える。

戸田建設

平安時代、湯原周辺でたら製鐵が行われていて、過酷な仕事を終えた鉄山師がここで疲れを癒やしたのが始まりだともいう。混浴だが、これほど整備された露天風呂を無料で開放し続ける湯原の人々のスピタリティーには頭が下がる。優しさは時代のキーワードである。